

庄内の砂丘

小牧實繁

本篇は今夏北陸奥羽の海岸地方に試みたる研究旅行中踏査の成果にして前に「歴史と地理」誌上に發表せる「北越海岸砂丘所見」の續篇をなすもので、今後着手すべき該海岸の地質學的、

史前地理、歴史地理的研究に基礎知識を供すべきものである。然れば此れのみにては大して興味あるものとは思はれないが然しながら單なる該海岸砂丘の現状叙述のみにては多少の興味はありと信ずるので茲に此れを發表する次第である。叙述は大體踏査の順序に従ひ最上川左岸に於いては南西より北東へ、同右岸に於いては北東より南西に及ぼす事とする。斯くて叙述が本篇の大部分を占めるのであるが、所々には多少の自然地理的、人文地理的卑見を述べる積りである。讀者は幸に陸地測量部二十万分一帝國圖

酒田、五万分一地形圖酒田八號加茂、同四號鶴岡、同三號酒田、同二號吹浦圖幅を參照せられん事を乞ふ。

大山町より西北西加茂町に至る道路は實に堂々たる加茂街道にして高距百六十餘米の小分水嶺に開鑿せられたる隧道の如き殊に人目を牽くものがある。之れ一に鐵道敷設以前に於て加茂港と其の後背地 (Hinterland) たる大山、鶴岡等との交通頻繁なりし事實を物語るもので、赤川に臨める庄内の一中心地鶴岡市と加茂港とを連ぬる加茂街道が小分水嶺に取かかる麓に大山町は發達したものであると云ふ様な事も考へられぬではない。然しながら自分は今日かかる問題を考へようとはして居ないし、又其の材料も

集まつて居ない。大山町より自働車を利用し峠を越して加茂町に出で海岸傳ひに北東に走る事小許にして湯野濱温泉に達する。此の海岸は大部分險岸にして、所々前面に狭き砂濱が發達せるのみ、其の風景は越後村上より温海、五十川、三瀬を経て大山に至る羽越線沿岸風景の連續で其の旅人の心目を樂しましむる事山陰線沿道の風景に勝るとも劣らない。鳥海山は正に伯耆の大山を偲ばしむるものがある。大山驛より約半時間にして湯野濱に達する。湯野濱には温泉あり、之れが地名の基となつて居る。數多の旅館と土産店とあり、斯かる邊土に斯かる聚落の發達せるだに都會人士の眼を眩らしむるに、龜屋の如き堂々たる三階建瓦葺トタン葺を交へたる大建築なるは驚くの外ない。然れど家屋は一般には板葺に河原石を置ける奥羽共通の建築にして旅客に湯治本意の地方人多きは心地よい。龜屋の屋内に雜貨店を設けたるが如きは近代的大病院の設備を模倣したるものならんも、其は其れにて湯治客本意の温泉宿の氣分を味はしむる

庄内の砂丘

に充分であり、板葺に丸石を載せたる海岸旅館の、道路より下部を納屋に利用し、道路よりすれば二階、海岸より見れば三階建にして、瓦葺トタン葺等の比較的少く、多分に地方色を現はせるも心地よく眺められる。殊に此の海岸より見たる鳥海の峻峯は殊に秀でて美しく、絶えず旅人の心目を樂しましめ、遊子をして其の身旅にあるの幸福を思はしめる。最上川左岸の砂丘は實に此の地點に起り蜿蜒として北北東に走るのである。南方より來りて該砂丘帯を踏査せんとする者は先づ湯野濱温泉に一夜英氣を養ふを便とする。

湯野濱より北上して酒田を指すに、砂丘が湯野濱後方の第三紀層に迫れる所は高度比較的大に、此れより北方第三紀層に迫らざる所は高度比較的小である。(之れ風の力學より考へ最も自然の事である。)即ち湯野濱より七窪に至る道路と、湯野濱より西郷村千安京田に至る道路との分岐點邊より砂丘は次第に低平となるのである。此れ此の邊より第三紀層の某盤が全く海面

下に没し去るからである。此の邊の砂丘は北越の砂丘と同様、植物を以て固定せられ、後方は畠地として開墾せられ甘藷、大根、茄子、葱、粟等が栽培せらるる所となり、又所々に數多の乳牛が放牧せられ、七窪に至る道路より東方は松林となり、東するに従ひ次第に高く緑林鬱蒼として茂り、西鄉村千安京田の北方、七窪聚落の南東に於いて最高六二・五米に達して居る。此の地點は從來余の知れる限りに於いては本邦砂丘上の最高地點である。最近に於ける地盤の隆起沈降の値は地方的に多少の差異を存する譯で、砂丘が風力の作用により眞に海面上幾何の高度まで堆積せられたるものなりやの考察に當りては、最近に於ける地盤の隆起沈降の値を究め之れを考察中に入れなければならぬけれども、斯かる事情は暫く全く度外視するならば、此の砂丘は從來余の知れる限りに於ては本邦最高の高度を有するものである。

更に北上して七窪附近に至れば道路の兩側共に松林となるのであるが、其の南方に於いては

畠に多く西瓜、眞瓜、南瓜、豆、小豆等を栽培し又畠の中にも所々松が植えられて居る。七窪に至れば道路の西側に碑石あり、次の如く記して居る。

霍岡町

盡力者

三井彌惣右衛門氏

菅原與右衛門

明治二十五年春月

齊藤 万吉

七窪開墾拂下出願

佐藤 清藏

山神同二十七年二月九日

今井與兵衛

許可相成

佐藤與治右衛門

爲紀念建之

齋藤治右衛門

世話人

齊藤 與助

佐藤寅之助

之れによれば鶴岡町の三井彌惣右衛門氏が明

治二十五年春七窪開墾の爲土地拂下を出願し同二十七年二月九日許可せられた事が明かで、其れより開墾に着手せられ、七窪聚落道路より東

西兩側の松林が植林せられ其れより畠地も開け聚落も戸口を増加した事が想像せられる。或は七窪は其れ以來の新村であるかも知れぬ、其れらの事情は追々調査する積りであるが、兎に角此の碑石は聚落の發達、荒地の開墾と關係あるもので見通しならぬものである。現在七窪の聚落は戸數十戸許あり、畠地には桃と桑とを植えて居るから其の生業は養蠶と果樹栽培とが主要なものである事が知れる。

湯野濱より七窪を経て袖浦村に至る道路は純粹の砂丘中を通ずるもので、此の附近の砂丘中には畠が開け又松が植林せられては居るものの元來が砂地を通ずるものであるから、車の通行は甚だ困難である。然れば車が荷物の運搬に絶對に用ひられない事はないけれども其の使用は他の地方に於けるが如くではなく、多くは馬背が利用せられる。東北地方には一體に馬がよく使用せられる様であるが、馬は急勾配の山嶽地や海濱の砂地には車よりも更に能く適する譯であるから、東北地方の此の海岸砂地で馬が多く

使用せられるのは全く自然の勢であらう。此の地方では第一圖に見る如く馬背の兩側に二つの籠を載せ其中へ瓜其の他の野菜果物等を入れて運搬させるのである。圖中の馬の立てるは七窪より袖浦村濱中に通ずる砂丘上の道路である

(圖 一 第)



第二圖は七窪聚落の北方より七窪聚落を取圍める防砂植松林を望めるもの、圖の中央、松林中より北上し來る道路が濱中に通ずる譯である。路傍の砂丘植物中には九月初旬なれども既に秋草の開花せるが認められる。

七窪より實に見事なる防風砂植松林中を北上する事二軒餘にして濱中の聚落到達する。此の松林は防風砂植松林中でも模範的のもので、



(圖 二 第)

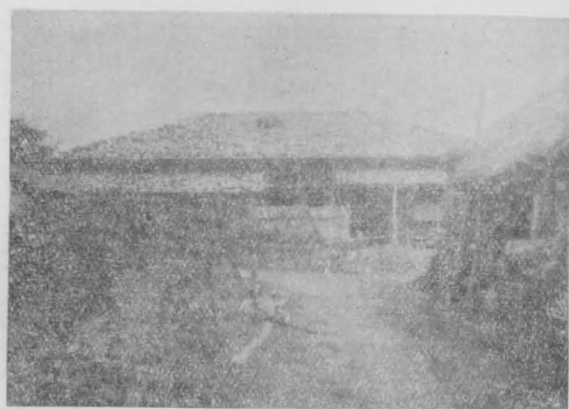
手入れもよく行届ける如く見受けられる。袖浦村濱中の住人にして第一圖馬上の人物たる丸山清八氏(此の人は然りと答ふる時ドウと云ふ、ドウはサウの訛

残れるを見るのである。然れば植林には古くより注意の向けられたるを知るのである。

湯野濱より七窪を経て濱中に至る道路の西側海岸に近く、殆んど一直線に南々西より北北東に向ひ、湯野濱より濱中に連互する高距平均十數米の前砂丘が存する。此は七窪以北に於ては松林のため目を遮られて見るを得ないのであるが、湯野濱より七窪に至る道路よりは明かに認め得る。即ち該前砂丘の東方は高距十米未滿の窪地となり其の東方、略十米線に沿ひ道路が通じ、其れより東方約五百米の間緩傾斜を以て砂丘は次第に二十米の高度に高まり、其れより急に高度を増して遂に六二・五米に達するので、前砂丘風下側麓の高距は十米、主砂丘向風側麓の高距は二十米、其の間が一帶の凹地となつて居るのであるが、該窪地南北の長さは約二軒、東西の幅は約一軒で、其北端に七窪の聚落が位置して居るのである。七窪の地名は加賀國河北郡宇ノ氣村地内の砂丘地にも存し、其の飛砂による道路の埋没に起原するらしき七窪狐の傳説

にして此の地方一般の訛ならん)の言によれば、此の松林に於いては古樹を伐採して次第に新樹に代ふとの事であり、實際所々に大なる株根の

は堀樗庵の著三州奇談に見ゆる所であるが、該地名が砂丘起伏中の窪地に起源する事は殆んど疑ふの餘地を存しないと思ふ。他の砂丘地方に



(圖 三 第)

於ける同地名の有無は余の未だ知らざる所であるが他にも尙一二は存する様な氣がする。濱中聚落は其の位置海岸汀線に接近すれども住民は能く海岸に砂

岸砂丘間の聚落中にあるを覺えず、聚落内は家並もよく、道路も廣く且調ひ、潤葉樹等も植えられ、所々に立派なる掘抜井戸設けられ、飲料水



(圖 四 第)

も清潔に、海岸砂丘中の聚落に似ず濱中は甚だ安定にして心地よき所である。其家屋の形式は全く一様でなく、藁葺四注の棟飾りを有するもの、(同じく養蠶

除垣を作れるを以て二百七十戸に達する比較的
大聚落の生活は略安定で一六・九米を最高點とする前砂丘より足一步風下側に入れば其の身海

のため空氣拔を有するもの)、瓦葺切妻、トタン葺切妻、板葺四注に丸石を載せたるもの等が認められ、一定ではないが、試みた奥羽信越等に

舟が置かれ又多くの網が乾されて居り、此の地に海上活動の出発點なるを示して居るが、草木に被はれたる前砂丘は其れより急に高まり、若



(圖 七 第)

ば、飛砂の移動は案外に少く、砂丘向風側の生活も然かく難澁ではないのかと思はれる。砂濱と前砂丘との關係は第七圖に見る如くである。

し前面に該砂濱の發達なくば、純粹の砂丘險岸 (Dünensteilküste) と云はるべき急斜面をなし、而して其の向風側斜面に少數ながら漁家存する事實より推せ

海岸より前砂丘を越え、濱中聚落を東に横ざり、氏神岩船神社に至るに、傍に「濱中郵業功績之碑」あり、之は濱中聚落の起原、砂丘荒廢地の開墾と關係あるものに付き、聚落地理の研究乃至は農政史の研究上見遺すべからざるものであり、同地點の「濱中丘林碑」「奥山翁壽碑」又共に參考とすべきものである。此れより濱中小學校の北を尙東して廣岡新田を指すに、道路より南側小許の地點に高距五四米の高所あり、檢するに今松林を以て被はるるも元來純粹の砂粒よりなつて居る。濱中の海岸より約二秆の距離にあり、緩傾斜を以て漸次昇つて居るから然く高所にありとも思はれないが、實際は五四米の高度を有して居るので、砂丘としては可なり高い方である。斯かる高度大なる砂丘の發達には、上記の如く最近に於ける地盤の隆起も關係して居ると思はれるが、假令地盤の隆起が手傳つて居らぬとしても、二秆の距離に付き五〇米の高距即ち四十分一位の勾配ならば、砂粒は次第に吹上げられて五四米まで堆積せられたとも

考へられぬではない。然しながら、其の場合には、砂丘植物の試みる妨害を越して、砂粒が如何にして二籽も内陸へ押寄せられ、五四米もの高所に堆積せられたかと云ふ事も問題となり得るから、矢張り地盤の隆起と共に、砂丘の海面上の高度は次第に高まり、他面海岸の砂質海底が一部分海面上の陸地となり、其の結果、最舊最高の主砂丘が海岸線より約二籽の内陸に後退するに至つたものと考へるのがより妥當であらう。斯く考へるならば、湯野濱より濱中に連る直線状一列の海岸前砂丘の成因も、又該前砂丘主砂丘間の幅廣き一帯の窪地の成因も共に比較的容易に説明出来ると思ふ。

此の邊の主砂丘は海岸よりの距離遠く、従つて砂粒の供給少く飛砂の害少く植物能く茂生し植林比較的容易で、一帯の松林を以て能く固定せられて居る。松林の茂生が砂丘の固定に如何に有効であるかは第八圖に見る如く樹根が深く砂中に喰ひ入り協力して砂の固定に努力して居るのにも明かであらう。圖中の断面は、道

路の擴張により自然に無心に現はれたるものなれども、砂丘地方農政家に示されたる無上の好教訓である。斯くの如きは濱中より廣岡新田に至る道路の

南側に認め得る所である。



(圖 八 第)

該断面の東方から、砂丘は其風下側に移るのであるが其の傾斜は向風側に於けると同様甚だ緩である。第九圖は第八圖断面の東方より西方断面の方向に向ひ砂丘の風下側を撮影せるものであるが、圖によつても其の傾斜の如何に緩なるかは知れると思

ふ。斯くの如く傾斜は緩であり、殊に飛砂の害が少ないのであるから、畠地の開墾には最も適して居る譯で、圖の遠景松林の風下側、圖中近景



(圖 九 第)

に見る畠地

は能く開墾せられ、此所に桃、柿等の果樹桑樹等を植え、野菜としては蕎麥、菊、百合、粟等を、又廣岡新田附近に於いては葱、韭、茄子等を栽培して居り、其の地盤は元來砂地であるけれども腐植土の混合既によく、湯野濱より濱中に至る海岸砂丘中の畠地の如き砂質地ではなく、車の

通行も然かく困難でないから、荷物の運搬には車も使用せられては居るが、然し轍の跡深く地中に喰入れるを見ては其の通行の甚だ容易ならざるを察する事が出来る。

風下側を下りて廣岡新田に至るに、道標に砂丘道を山道と記して居る。方俗砂丘を山と稱するのであつて、此は越後に於て砂丘を呼んで山と云ふと同様である。地理的術語に關係ある方言の調査の如き、事趣味的研究事項に屬するも、砂丘滲出の地下水を加賀内灘村に於いてシミタレと稱し、(龜の尾の記參照) 砂丘中の沼澤地を越後松ヶ崎濱村に於いてタンポ又はヌマと呼び砂丘自身を越後及び羽前に於いてヤマと稱する如き、又多少の興味なきにしもあらず、研究中の挿話にはならうかと思ふ。

廣岡新田には牛肉の罐詰や素麵位を賣る飲食店はあるから、旅行者もさしたる不便は感じないで済む。之れより、東に水田面を眺め、西砂丘の風下側邊縁を通する道路によつて北上する事二軒餘にして、赤川(最上川支流)大山川の合

流點に達する。赤川は此れより上流約五・五軒對島の地より右合流點に至るまで、大體北四〇度西の方向に流れて來るのであるが、合流點に於て急に直角以上（約一一四度）の大屈曲をなし（北五六度西より北五八度東に急轉す）其れより大體北一〇度東の方向に流れ、酒田南方に於いて最上川に注ぐのである。此の事實より推せば、赤川は元來は大山川を合せたる後、尙西北流し、北最上川に合する事なく、大體之れと平行の流向を以て日本海に朝せんとしたるものであるが、砂丘に妨げられて果さず、砂丘と同方向に北北東に流れ、終に最上川に注げるものと思はれる。内務省に於いて、該曲屈地點より砂丘を開鑿して直接赤川を日本海に放流せん事を企劃し、大正十年工事に着手し、既に砂丘の全幅に亘り約三十米掘下げ、尙掘鑿機四臺を以て殘餘の二十七米を掘下中であるのは、赤川の直接日本海に朝せんとする自然の意志を遂げしめ、常に河水の氾濫する大曲附近の被害を減少せしめ、且つは下流酒田港に於ける土砂の堆積

を少なからしめんとするに外ならぬ。因みに記す、該掘削は大曲より海岸まで延長一五〇〇間上幅二〇〇間、下幅四五間、深さ砂丘の最高所に於て一六



(圖 十 第)

〇尺となるべき豫定、掘取後不用の砂は機關車を以て前岸低地の掘割兩側に運搬す、掘割斷面を見るに地層は全部砂よりなり、所々堆積砂層の傾斜面を見るべく、頂上より三〇米は確實に砂丘堆積層にして其れより基部と雖も又純粹の砂丘堆積層ならん事を想像せしむ、斯く

地層が全部砂粒よりなるを以て工事中風あれば砂飛びて工事困難なるも降雨は却て妨害なし、但し大雨は砂の崩落を招くべければ側面は將來



(圖 一 十 第)

芝草を張り又河水の通すべき部分及び其附近には護岸石を施す筈と云ふ。第十圖は赤川大曲より直接之れを海に通せんとする掘割工事を其の東方より望める

所、第十一圖は掘割工事場附近より左手遠景に黒森砂丘の風下側、右手遠景に赤川大曲を望める所で、圖中の聚落は黒森南方の小聚落である。

黒森の地名は、其の西方標高六一米の地點及び其の北方高距六四・三米の地點を最高所とする砂丘上の黒松鬱蒼として繁茂せる（第十一圖に於いても明かに之れを認むべし）に其の源を發するものの如く、又赤川の名は其の河床の砂赤く洪水の際は河水恐らく赤色の濁水と變ずるに因るものの如く、黒森の青松赤川の赤砂烏海の白雲は互に相映じ相對して又一種の景觀を呈して居る。

赤川は對島の邊まで小舟を通ずるか。少くとも黒森までは通ずる。其は第十二圖にも見る如く帆船が黒森まで溯航して居るのに見るも明かである。廣岡新田某婦人の言によれば、廣岡新田より酒田に出づるに、黒森より舟便によつたと云ふ。黒森には現に第十二圖にも見る如く河原石を積んで小波止場を作つて居る。

黒森に好菓翁壽碑（大正六年十二月建之）あり。此は砂丘を利用して果樹栽培に盡瘁せる某篤志家の碑石であつて、農政若しくは農政史研究者にとり一參考資料を供するものである。

黒森砂丘の風下側より地下水、加賀國にて所謂シミタレの滲透し出づる所あり、其の地點は半圓形の凹地をなして居る。該半圓形は砂丘風下



(圖 二十 第)

側の風下の方向に於いて圓の一半を缺くものであつて、之れより其成因を考察する事が出来る。即ち黒森砂丘に於いては元來今日見る如き美林の被覆なかり

較的速かなるも、該地點に於いては然らず、茲に風下の方向に於いて圓の一部を缺ける半圓形の凹地は生じたのであらう。又黒森の砂丘が早くより略均一に植物を以て被覆せられ風に對する抵抗又略均等なりしとするも、地下水滲出する該地點に於いては、流水次第に風下側砂粒を運搬し去り、茲に風下の方向に於いて一部缺けたる圓形の凹地形成せられたりと考へらる。恐らく上記二つの場合は全然切離して考へる事が出来ないのかも知れぬ。而して該考察の最も正當なるを證する事實は、因幡濱坂砂丘中の半圓形凹地に於て實に明瞭に認めらるる所である。其の成因は大體上述の如くであるが、此所より滲出する地下水には清冽掬すべく飲料にもせまほしきものあり、其の滲出する附近は單に松のみならず砂丘地には甚だ稀なる杉の成育を可能ならしめて居る。

しとするも、地下水の滲出する該地點には比較的多數の植物生育し、從て該地點の風に對する抵抗力大に、周圍の地に於いては飛砂の移動比

黒森の北方、道路より西方の砂丘は高距六四・三米に達し、高度に於いては西郷村七窪東方の砂丘(六二・五米)を凌駕し、余の知る限りに於

ては本邦最高の砂丘である。

此れより北方坂野邊新田に至る道路の東側に存する二つの沼は、恐らく砂丘後方の潟若しくは赤川舊河床の殘物であらうと思はれる。

坂野邊新田聚落の南端村社八幡神社境内入口に「大正二年八月二十五日 白崎吉藏撰書並篆額 坂野邊新田記念碑」あり、境内に「天保十三年壬寅七月二十九日村中建之 佐藤知足翁之壽碑 配松世佐藤氏壽碑」及び「明治廿六年八月 門人建之 佐藤慎終翁之碑」あり、何れも新田開發、砂丘地開墾と關係あるもので、聚落發達史、農政史等の研究上參考とすべきものである。

坂野邊新田聚落の形式は略五萬分一地形圖によつても想像し得る如く、道路は略南北の方向に一直線に通じ、幅廣く、其の兩側に家居あり、該道路の情態は該聚落が一定の計劃により新田開發の當初開かれたるものなる事を示し、家居には、繞らすに宅地の周圍に先ず大なる圓礫を積みて作れる石垣を以てし、其の上に樹木を植え或は更に柴垣を作つて居る。其の大觀は第十

三圖（新田聚落の北半を南方より望む）に見る如くであるが、其の街路の農村に於けるものとして、甚だ堂々たる點に新田の氣分が漂つて居る。其の個



（圖 三 十 第）

々の家は第十四圖に見る如く、門なくして直接に宅地に入り、入口に土藏あり、土藏と家居との間に外庭あり、外庭より直接南面せる玄關に通

じ、外庭の東に中庭を劃する屏と中門とあり、母屋の構造は四注に棟飾りある平入にして、藁葺、屋根に反りあり寺院の屋根を聯想せしむるもの

で、別に一部分瓦葺の下庇あり、農村住宅としては實に堂々たるものである。個々の家屋間多少の差異はあれど大同少異で、道路の東側の家



(圖 四 十 第)

屋は凡て此の形式のものである。

反之西側の家屋が總じて著しく見劣りするは、必ず何等かの意味を含むもので、其は恐らく新田開發當初に於ける一定の計

劃と關係あるものの如く、新田開發の史的研究者に對し、該坂野邊新田は多少の興味ある材料を供するものたるを想はせる。

坂野邊新田北方の砂丘には、松林中に薯、胡麻等の野菜が栽培せられ又柿、桃等の果樹が植えられて居る所があり、道路は砂丘中を通するも、砂利を敷き手入せるを以て、身砂丘中にあるを忘れしめ、且水田面より遙かに高き部分を



(圖 五 十 第)

通するを以て誠に高爽の感を興さしめる。第十五圖に見るが如きは、砂丘中にありてよく手入せられ車をも通する良道路である。圖に見る如く一帶の松林を以て保護せらるるを以て全く安定にして砂の害を被る事甚だ稀である。

坂野邊新田より東裕山^{あびり}まで約一軒餘の間は、道路はかかる高爽なる砂丘上を通るのであるが、東裕山に於いて略水田面まで降り之れより



(圖 六十 第)

以て被覆せられ、全く安定であるが、其の風下側斜面の一部に於いては、樹木の伐採せられたる爲(松の大木の切株残り)小部分崩壊して

北方に飯盛山を望む事となる。第十六圖は東裕山の南端より、第十七圖は同北端より北に向ひ飯盛山を望める所である。飯盛山は一面松其の他の砂丘植物を

砂を露出して居るのが認められる。該露頭に於いて檢するに、飯盛山(四一・八米)も全部堆積砂粒よりなる純粹の砂丘である。



(圖 七十 第)

に酒田港方面に續いて居る。

酒田町の南方中瀬に於いて渡船により最上川を横ぎるに、烏海の秀峰を背景とせる酒田の聚

飯盛山北西の砂丘風下側斜面の水田面と接する附近には美しく耕されたる畠地あり、之れを遠望すれば恰も薄毛氈を敷き詰めたる如く、該畠地は北方遙か

落を望む事が出来る。酒田町は、最上川右岸より北北東に走る砂丘の南端斜面に位するを以て、之れを最上川水面上より望めば其の稍階段狀に發達せるを認める事が出来る。

酒田より吹浦に至る鐵道線路より遠望するに、最上川右岸より日向川左岸に至る海岸砂丘は、一面美林を以て被覆せられ、日向川右岸より吹浦川左岸に至る間又略同じ、其の高度の如きも最上川河口より吹浦川河口に至るまで殆んど相等しく、唯西遊佐五七米の砂丘は稍高く、日向川、吹浦川兩河口の南方に於いては稍低きのみ、延々として北北東し、突兀たる鳥海の秀峰と好對照をなし、而して吹浦附近に於ては、鳥海裾野の一端鐵路の東側に迫り、砂丘の北端鐵路の西側に及び、砂丘と火山とは將に此地に握手を交さんと試み、吹浦川は實に火山砂丘兩地形の接合線をなして居る。

吹浦以北は鳥海の裾野直ちに日本海に入り全くの嶮岸をなして居る。吹浦より小峠を越し、嶮岸上を通ずる危き縣道を北する事小許にして

湯ノ田温泉に達する。赤濁せる炭酸泉を湧出し、温泉宿二軒の設備がある。電燈を引かざる薄暗き酒田屋のランプの下に、波の音虫の聲に心を澄まし、淋しき漁火に思ひを寄せ、一日の備忘録を作るも又旅の思出とはならう。

空晴れたる日は、吹浦峠より北六〇度西遙かの青海波中に扁平に横たはる飛鳥を望む事が出来る。此所、峠の岩石は安山岩であるが、峠を降れば吹浦聚落の北端に國幣中社大物忌神社が鎮座します。本社は石燈の上、蒼鬱たる森林中、吹浦聚落よりは遙かに高く高距約六〇米に特立する形勝の地點を占めて居る。此は恐らく石器時代以來の地方の氏神なりしならん。其の附近に多くの石器を發見するの事實と併せ考へ、聚落地理の研究上將來必ず問題となるべきものである。

吹浦聚落家屋の形式は、第十八圖に見る如く、酒田等に於けると略同じく切妻妻入であるが、單純なる切妻ではなく、妻は壁から長く突出し甚だ不安定な感を與へ、扱下段に入口の方向に

緩傾斜を以て長く突出する下庇があり、支柱を以て之れを支へて居る。雪に對する用意の程が現實に窺はれる。近來本邦の人文地理學的研究



(圖 八 十 第)

地質（建築材料等と關係あり）地形（構造と關係する事あらん）氣候（風力、降雨量、降雪量、氣温、濕度、日射度等は家屋の形式構造と密關

に於ても、家屋の形式構造等に注意を拂ふ新傾向が現はれて來て甚だ慶ばしい次第であるが、單なる形式構造の叙述のみに止めず、其の地的條件即ち例へば

係あらん）生物界（家屋材料と關係あり）等との關係を考察すれば、其は將來或は人文地理的研究の好題目ともならう。單なる形式構造の叙述のみにては未だ好事若しくは趣味の域を脱しない。趣味好事何れも可、然れど冀くば可成的之れを研究的、學問的たらしめ度いものである。實際家屋の形式構造等を當該地方の地理的條件と關係づける事は、凡ての場合に都合よく行くものでなく、甚だ難事である場合も多いのであるが、此の場合には比較的簡單に相互の關係が辿られる様な氣もする。

吹浦東南菅野谷地宇夫須那神社入口に「大正十一年七月 菅野谷壑開發百年記念」碑あり、之れも近世新田開發の史的研究に一參考資料となるものである。

菅野の聚落は砂丘風下側に發達したものであるが、此の砂丘には珍らしく樅の木も植えられて居る。第十九圖は曾根原六藏（種樹翁墓に至る墓參道の樅の並木を示す。此等の植樹は村落創立時代に於ける先人の苦心經營を如實に偲ば

しむるもので六藏翁の號と亭々たる樅の並木とは雄辯に村の歴史を物語るものである。墓地内に存する「天保庚子秋八月江都西島長孫撰文並書題額 孫曾根原某建 菅野邨創立記」碑は先人の徳を頌する子孫感謝の表徴である。恐らく

(第十九圖)



郷の徒と雖も敬虔なる感謝の念を禁じ得ない。菅野の南方菅里の砂丘は、高距五九・六米に達するが、松林繁茂し全く安定である。此處にも先人苦心の跡を偲ばすには居られない。試みに之れを加賀内灘、因幡濱坂、同細川等の砂丘

(第二十圖)



飛砂の害甚だしく耕作に適せざりしならん、砂漠不毛の地に、先づ防砂植林を經營し而る後開墾に着手し、菅野村幾人かの住民をして口に糊するを得しめたる先人の徳に對しては、吾等異

と比較し、若し之れが後者の如く松林を以て被覆せられざるものと假定し、其の飛砂の害を想像するならば、蓋し思ひ半ばに過ぎるであらう。第二十圖は該砂丘風下側に於ける松林の

情態を示すため、秋田街道より出戸に至る間路の分岐點より撮影せるものである。右手松樹の根許に「文化七年 十月十八日 子徳曾根原君碑」なる安山岩の石碑が存する。碑文存せず、是のみにより其の由緒を知る事は出来ないが、曾根原子徳が砂丘植林の恩人たる事は想像に餘りある。植林による砂丘の固定は、茲に桑樹並びに柿、桃等の果樹、蕎麥、大根、薯、豆等の栽培を可能ならしめて居る。

秋田街道は砂丘風下側の水田面よりは遙かに高き斜面を通ずる三間道路であつて、縣道であるから、砂利を敷き等して能く手入れが行届いて居る。此は古來の交通路なりしが如く、砂丘植林の事業未だ完全ならざりし時代に於いては、多少飛砂の害を被つたであらうが、其れでも卑濕な水田中を通ずる道路よりは勝り、殊に秋田街道の一驛たる吹浦と酒田とを連ぬる最短線に近いから、多少の飛砂の害に拘らず、高爽なる砂丘風下側斜面上の此の交通路が利用せられたものであらう。第二十一圖に見る秋田街道の左

側即ち東側直下には、松林を距て、月光川あり、沿岸には葎が茂生して居り、其の水田面の卑濕なるを示して居るのである。



(圖 一十二 第)

菅里より
菅野南山に
至る砂丘上
道路の松並
木は實に堂
々たるもの
にして、松
籟は正しく
先人の徳を
稱ふる頌歌
の如く、或
は風砂に對
する勝利の
凱歌の如く
殊に遊子の耳を峙だてしむるものがある。斯かる植樹によりて安定にせられたる砂丘は、又能く西瓜、牛蒡、粟、桑、梨等の栽培を可能ならし

め、防砂防風林中に隠れたる聚落の生活は、さ
まで窮迫でない如く見受けられる。

南山聚落南部に於ける砂丘風下側は、斜面甚



(圖二十二第)

だ急であつて、目測三十度を超ゆるものゝ如く、直下に月光川北流し、川を隔て、平坦々豊沃なる庄内の水田開け、其の間點々たる聚落の發達を望む事が出

來る。第二十二圖は菅野南山より五分市方面を望み坦々たる庄内の平野と平野中に發達せる點々たる聚落を撮影せるもの、第二十三圖は逆に

水田面より川を隔て、藤崎砂丘の風下側を望めるものである。

藤崎に於ける砂丘風下側の小流は、南方日向



(圖三十二第)

川の六ツ新田に於ける細分流が、南々西より北々東に連互する砂丘の風下側脚下を砂丘と同方向に北々東流し、北方菅野南山に於て吹浦川の支流月光川に合

流する一種の疏水であるが、其の藤崎より東方江地に通ずる聯路との交叉點に於いて、河床に泥炭層の露出を認める事が出来る。而して又同

様の事實は、月光川本流が江地に於て南東より北々東に轉する大曲に於ても認め得る、即ち此の地點に於ては黑色の泥炭質層が明瞭に而も比較的廣範圍に現はれ、偽層 (Cross-bedding) をなして河成の砂礫層に被はれて居るのである。此の事實は、嘗て此の附近が一帶に沼地又は潟であつた事を想像せしめる。即ち該泥炭層は、嘗て此の附近に存在せし沼又は潟の堆積物と解せらるゝのである。越後北蒲原の平原中に、嘗て紫雲寺潟なるものが存し、石器時代に於いては甚だ廣大なる面積を有せしならんもの、次第に埋没せられ、徳川時代の中葉、終に乾拓せられて水田と化し去つた事は「史林」第十一卷第一號に説述せる如く、又日本海沿岸砂丘後方の潟の、次第に埋没して死滅し、又は死滅に瀕せる例甚だ多き事は「歴史と地理」第十六卷第一號に記述せる如くであるが、此等の例と併せ考ふるならば、古くは庄内砂丘の後方、東方山地との間、現今平坦々たる水田の發達せる地域を占め、廣大なる潟、少くとも藤崎、江地附近に

庄内の砂丘

擴まる潟が存したるもの、地盤の隆起、流入河川運搬物質の堆積、其の他人工の作用等により埋没して水田面と化し去り、其の影を滅したるものと解して不可ないであらう。該潟湖の舊時に於ける範圍の追跡、其の生成より死滅に至る道程の究明、此れ等は史前地理的、歴史地理的研究の好題目であつて切に同學の研究を期待する所であるが、余も又不日何等かの研究成果を發表し度いと思ふ。

以上私は庄内砂丘の現情を略叙し、尙要所々々に於いて將來研究せらるべき興味ある事項に注意する所があつた。其れ等事項に對して深く研究の歩を進め得なかつたのはかへすがへす遺憾であるが、本稿は素、庄内砂丘の現狀叙述を目的として起稿したものであるから亦止むを得ない。該地方の地質學的、史前地理、歴史地理學的考察は之れを他日に譲り、別稿に發表し度いと思ふ。

(一九二五・二・二五——一九二六・二・二四)